

幼稚園教育要領にそくした野外観察の実践

—動物・植物・自然を学ぶ—

福田 靖

1. 野外観察の意義

文部省では平成10年12月に幼稚園教育要領の改訂を行った。それに基づき、幼稚園教育要領解説書が平成11年6月に出版された。解説書の「環境」領域では次のように記載されている。「生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつこと。また、幼児が、遊びの中で周囲の環境とかかわり、その意味や操作の仕方に関心をもち、物事の法則性に気付き、自分なりに考えることができるようになる過程を大切にすること及び自然とかかわりを深めることができるよう工夫すること」を新たな内容の取扱いとして示した。身近な環境とかかわりの中で保育することが重要であると指摘している。野外観察が、これらの趣旨に対応しているかを以下検討していく。

身近な環境とかかわりに関する領域「環境」では“周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。”とある。幼稚園内部では自然とのふれあいに限界がある。自然の事物・現象は多様であり、四季折々の変化を体験させるためには園外に行くのが効果的である。川の近く、公園の周り、里山周辺、海の干潟や海岸、農耕地の小道、神社や寺院、近くの空き地など野外観察可能なところが数多くある。生き物を通して自然に触れる機会をもち、幼児なりにその形や大きさ、美しさ、不思議さなどを全身で感じ取る体験をもつようにすることが大切である。

このような自然と触れ合う体験を幼児が十分に得られるようにするためには、園庭の自然環境を整備したり、地域の自然と触れ合う機会をつくったりして、幼児が身近な自然とかかわる機会を多く設定すべきである。また、幼児が心を動かす場面は必ずしも大人と同じではないことにも留意すべきである。例えば、幼児が朝、クモの巣に光る露に心を動かす、自分で育てた花から取れた種をそっとポケットにしまい込む、水面を滑るように動くアメンボの動きの不思議さに駆られてじっと見入るなど、幼児は日常の何気ない生活場面で心を揺り動かしている。このような幼児の自然との出会いを見逃さないようにすることが教師のかかわりとして大切である。自然と出会い、かかわりの体験は、自然に対する畏敬の念、親しみ、愛情などを育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを培う上での基礎となるものであると解説している(文部省、2003)。

自然領域の園外保育を、野外観察と呼ばれることが多い。その野外観察では身近な自然の小川や草原、さらに山や海などの自然の中に入り、自分自身の五感、目、耳、手を使って、自然の事物や現象を直接、見て、聞いて、触れて感じ取り、思考する。この幼児の直接体験が大切である。しかし、野外観察は園外で行うものであり、安全面に十分配慮しておこなう必要がある。野外観察を含めた園外保育は自然領域の活動に限らず、園外での生活指導、運動的な活動、社会事象の

認識など、他の領域との関連も多く、こうした他の領域を中心に計画される園外保育もあることが、指摘されている（教師養成研究会幼児教育部会編集、1989：文部科学省、2003）。

2. 野外観察の目標と内容

野外観察の目標は幼稚園教育要領の示す、身近な環境とのかかわりに関する領域「環境」のねらいと一致する。要領のねらいは、(1)身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ。(2)身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする。(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。となっている。野外観察では環境（いろいろな自然の事象）に対して、自分で見て、触れて体を通して経験するその範囲が大きく広がる。幼児が興味を持てば、更に、遊びに用い、新たな使い方をを見つけることになる。幼児にとっての生活である遊びとのつながりの中で、環境の一つ一つが幼児にとって深くかかわりをもつ。したがって、まず何より環境に対して、親しみ、興味を持って積極的にかかわるようになることが大切である。更に、ただ単に環境の中にあるものを利用するだけではなく、そこで気づいたり、発見したりしようとする環境にかかわる積極的な態度を育てることが必要である。また、環境の中でも特に、物の性質や数量、文字などに対してのかかわりを広げることが望まれる。幼児を取り巻く生活において、物については当然だが、数量や文字についても、幼児がそれらに触れ、理解する手掛かりが豊富に存在する。それについて単に正確な知識を獲得することのみを目的とするのではなく、環境の中でそれぞれがある働きをしていることについて実感できるようにすることが大切である（文部科学省、2003）。

具体的には幼稚園教育要領の環境領域の内容として次のものがある。野外観察との係わりから点検していく。

- ① 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。この項目における野外観察の役割は自然と幼児の触れ合いの場を拡大し、その中で驚きや感動さらに、自然に対する畏敬の念、親しみ、愛情などを育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを培う上で重要となる。
- ② 生活の中で、様々なものに触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。幼児は様々なものに囲まれて生活し、物とのかかわりを深めていき、物の性質や仕組みに気付く。たとえば、野外観察でダンゴムシに興味を示した幼児はどんどころにいるのかを知り、ダンゴムシの形態と機能の関係を知ることになる。遊びを通して生き物の性質やかかわりを深めていくことになる。
- ③ 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。野外観察で自然や地域社会の人々の生活に日常的に触れることや季節感を取り入れた幼稚園生活を体験することを通して、季節によって、変化があることに気付く。
- ④ 自然などの身近な事象に関心を持ち、取り入れて学ぶ。野外観察では四季の草花や河川の小石なども遊びの素材とし、それをもちいて遊びをする。また、野外観察では自然の事象に心を動かし、自分の遊びの中にとりいれていくことが自然に見られる。
- ⑤ 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりす

る。野外観察では園内で見られない小動物や草花と一緒に遊ぶことにより、生き物への豊かな感情が芽生え、生命を大切にしようとする心が育まれる。更に、生き物の飼い方にも目を向けるようにすることが大切である。

- ⑥ 身近な物を大切にす。この項目は日常的な幼児とのいろいろななかかわりの中で物を大切にしようとする心を育てることが肝心である。園内外の保育で一貫しておこなうべき項目である。
- ⑦ 身近な物や遊具に興味を持ってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。この項目の物や遊具が野外観察では、生き物と自然にあたる。その生き物や自然を見て、触れて、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ機会が広がる。
- ⑧ 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。野外観察ではドングリの実を数えたり、落ち葉拾いをして、多様な形に接する機会がある。このように自然の中での体験で数量や図形に親しむことができる。
- ⑨ 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。この項目では野外観察で行った経験を基に動物や植物の絵を書く。次に言葉と文字の対応を示す。例えば、「アリ」は「あ」と「り」という文字に対応していることを知る。また生き物の絵を標識としてシンボルとして活用することもできる。
- ⑩ 生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。

- ⑪ 幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。この⑩と⑪は直接、野外観察と関係づけにくい。

野外観察は郷土の自然、さらに日本の自然を考える背景となる。それがひいては国家、国旗が生活の中から自然にでてくることにつながる。さらに園外保育が総合的な活動である点をふまえると⑩との関連も出てくる。⑩、⑪は総合的観点から関連する。

以上のように幼稚園教育要領の環境領域のねらいと内容が野外観察と直接9項目においてことごとく関連する。幼稚園という限られた中では、自然とのふれあいが十分ではなく野外観察を行うことで幼児の経験を多様にし、より深く広くしていく。自然の事象にふれるには、どうしても、園外へ出て行かなければならない。そして、野外観察という場合には、幼児が直接自然の事象に接して自分の目、耳、手などを使って自然とふれあい、自然について、何かを感じ取り、考え、扱うことを意味する。このように幼児は、野外観察により豊かな体験と感性を身につけることが出来る。

3. 野外観察の実践

観察対象を明らかにして目標や予想される幼児の活動を考える。次に幼児の発達段階にそくした具体的ねらいや指導を決定する。場所の選定は観察対象やねらいが満たされる場所を捜す。園に帰ってからの話し合いのできる時間が残るように行程をつくる。また、危険の少ないところを選ぶ。

野外観察の具体例を季節ごと、幼児の活動、指導上の留意点ごとに以下記載する。下記の表を作るにあたり文献として井上・小林(1996)、藤井(2005)、久居(1987)、小林(1996)、藤井(2005)、真野(1979)、無藤(2006)、奥井(2005a、2005b)、吉永(2005)、山内、八並(2004)を活用した。

表1 野外観察における年間を通して幼児の活動の具体例

季節	幼 児 の 活 動	指導上の留意点及び補足
春 三月から五月	<ul style="list-style-type: none"> ・春、公園や川辺、野原で植物の花探しをする。 ・花に集まる虫、チョウ、トンボ、ハチをみる。 ・食べられる春の野草をつむ。 ・オオバコの茎ずもう、レンゲ、シロツメクサ、タンポポなどで花束づくり、スズメノテッポウやカラスノエンドウで草笛をつくる。 ・水の中の生き物オタマジャクシやメダカ、カエル、アメリカザリガニ、小魚を捕まえる。 ・春の鳥を見て、鳴き声も聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物は芽を出し、花を咲かせる。集めた花を形と色で分けてみる。 ・友達と一緒に野外で虫さがしをする。ハチは危険なので特に注意する。 ・ゼンマイ、ワラビ、タラノキの芽、ウド、ツクシ、セリ、フキノトウ、イタドリ、ヨモギ、タケノコなどがある。 ・野外で植物をつみとり、遊び方や花束の作り方を指導する。茎ずもうではオヒシバ、カヤツリグサを使ってもよい。 ・採取用の網と入れ物を準備し、採集して持ち帰る。園では飼育用水槽を準備し、世話と観察を続ける。 ・ツバメ、ヒバリ、ウグイス、ホオジロ、キビタキ、シジュウカラ、ミソサザイなどがいる。
夏 六月から八月	<ul style="list-style-type: none"> ・梅雨のとき、カタツムリ、アジサイを見る。 ・夏、野山に昆虫探しに行く。セミ、トンボ、チョウ、カブトムシなどを野外で採集する。 ・海辺で遊ぶ。 ・水の中の生き物をさがす。 ・夏の食べ物、ナス、トマト、スイカ、キュウリなど夏の野菜はぐんぐん成長する。 ・ヤエムグラやオナモミのワッペン。ササの葉の船づくりをする。 ・星を見る会を父兄と夜に行う。夏の大三角を夜みる。(ハクチョウ座、コト座、ワシ座) 	<ul style="list-style-type: none"> ・草木が密生している場所にカタツムリがよくいる。 ・凶鑑を持っていき、その場で調べる。山にちかいところではクヌギ林でカブトムシがとれる。 ・干潮時のタイドプールにはヒトデやフジツボ、アメフラシ、や貝類がいる。干潟ではコメツキガニ、チゴガニ、やシオフキ、アサリガイ、ハマグリなど採集できる。 ・池や川などの水辺で水生昆虫を採集する。ホタルの幼虫やトンボの幼虫ヤゴ、メダカ、タイコウチなどがいる。 ・近くの畑を見て、栽培されているものを観察する。 ・秋の野草を使って、遊びかたや作り方を指導する。 ・父兄同伴でおこなう。天体望遠鏡も準備する。星座盤を見て星空ウォッチングをする。
秋 九月から十一月	<ul style="list-style-type: none"> ・晩秋には落ち葉拾いに行く。集めた葉で造形遊びをする。 ・秋の草原を探検する。 ・秋の虫の声を聞く。 ・月の見え方の変化を調べる。 ・畑のサツマイモを掘りに行く。 ・川辺や海岸で砂、土、水、石ころ、などあるところで遊ぶ。 ・初秋の畑のダイコン、ハクサイ、ナンキンマメを観察する。 ・秋、ツユクサやヨウシュヤマゴボウなどで色染め遊びをする。 ・いろいろな雲を見る ・野原でチョウ、コオロギ、バッタを採集する。 ・クリの実、カキの実、アケビの実など木の実を取りに行く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・秋は紅葉の季節、変りゆく自然をみる。いろいろな形をした葉をあつめる。持ち帰り、押し葉にしたり、絵を描いたりする。 ・あきの七草や、ヒガンバナ、リンドウ、ナデシコ、ヨメナ、アザミ、キキョウ、イノコズチなど多くの種類と出会う。 ・カネタタキ、ツクワムシ、スズムシ、エンマコウロギ、キリギリス、ウマオイ、マツムシ、ササキリなどいる。 ・満月、上弦、三日月に変化していくことを毎日自宅近くで7時ごろ観察する。 ・サツマイモ掘は父兄同伴でおこなう。畝と株のわりあてをする。 ・石に絵を描く、色の違う石をあつめるなどする。 ・秋の収穫物をいろいろ話し合う。 ・野外保育の折、採集してくる。 ・晴れ、曇り、雨の日の雲を絵に描く。 ・網や籠を持っていく。持ち帰り観察する。 ・クヌギ、コナラ、スダジイの木の実やマツボックリなどもある。木の実を使った遊びをする。

季節	幼 児 の 活 動	指導上の留意点及び補足
冬 十二月 から 三月	<ul style="list-style-type: none"> ・冬に近くの公園などで落葉樹の冬芽をみる。 ・冬花を咲かせるものもある。サザンカ、ツバキ、パンジー、ニホンスイセン、ハボタンなどの花がみられる。 ・冬の水辺はにぎやか、カルガモ、マガモなどカモの仲間が多くいる。 ・冬、雪が降るときは、野外で雪遊びをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・植物は葉を落として、寒さに耐える。葉は落ちているが木は生きていることを知らせる。 ・園に帰ってから花の絵を描いて特徴をつかむ。 ・北国から冬鳥がやってくる。鳥の声も注意して聞く。 ・寒くて雪が降ることがある。自然の事象に対する興味を持たせる。

上記の事例を野外観察で実践することによって、幼児は動物とふれあい、植物とふれあい、自然の四季折々の事象を見て、触れて、季節を感じる気持ちを大切にする。上記の事例にないことでも、地域の特性に合った自然観察を展開することが好ましい。多様な自然観察を通して、体験、経験を広げ、逞しさ、生きる力と知恵を身につけていく。更に、園内での動物の飼育、植物の栽培を加えることにより、更に経験を深め、充実した保育が可能である。現在言われている子どもの“自然離れ”が指摘されているが園内外の保育活動を通して、特に生き物と自然とのかかわりを持つ野外観察を四季折々に展開することが重要である。

4. まとめ

幼稚園という限られた空間では、幼児と自然との触れ合いが十分でない。野外観察を実践することで、幼児は自然との出会い、かかわりを多様にし、四季折々の自然の事象に興味や関心を示す。また、野外観察は自然に対する畏敬の念、親しみ、愛情などを育てるばかりでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを養う上での基礎となる。幼稚園教育要領の環境領域のねらいと内容が野外観察と11項目中9項目において、直接ことごとく関連していた。また、野外観察における年間を通しての幼児の活動の具体例を示した。この野外観察に加えて、園内での動物の飼育、植物の栽培をおこなうことにより、さらに体験を深め、充実した保育が可能となる。

引用文献

井上初代・小林研介、1996、幼稚園で進める環境教育、133pp、明治図書。
 藤井美枝子、2005、保育園・幼稚園「環境認識」のあそび、127pp、明治図書。
 久居宣夫、1987、自然観察のガイド、246pp、朝倉書店。
 教師養成研究会幼児教育部会編集、1989、新版幼児の自然指導、幼児教育叢書5、217pp、学芸図書株式会社。
 真野素近、1979、低学年理科教材、福岡県教育センター紀要 53：1-43。
 文部科学省、2003、幼稚園教育要領解説、206pp、フレーベル館。
 無藤隆、2006、フレーベル館の図鑑NATURA12、「はるなつあきふゆ」、128pp、フレーベル館。
 奥井智久、2005a、子どもと環境－理論編－、190pp、三晃書房。
 奥井智久、2005b、子どもと環境－実技・実践編－、159pp、三晃書房。
 田中敏隆・吉永八代子、2005、幼稚園・保育所の保育内容－理論と実践－、194pp、田研出版株式会社。
 山内昭道・八並勝正、2004、新・幼稚園教育要領準拠領域環境。168pp、同文書院。